

浜崎先生の声が 本から聞こえてきそうです

がんばり続ける直前、教え子たちに語り、最後の授業をして話題となった鳥取県立鳥取西高の元教諭、故・浜崎洋三さん(当時六〇)の著作集「伝えたいこと」が出版された。浜崎さんを慕うかつての生徒たちが先生の言葉を残そうと企画した。終戦時、国民学校(今の小学校)三年生だった浜崎さんは、終戦を境に教育がガラリと変わった体験から「声」を大にして人を動かそうとする人の語りごとを信じてはいけないと説いた。

(鳥取支局・羽根 和人)

浜崎さんは生徒から親しみを込めて、「洋三さん」「浜さん」と呼ばれた。京都文学部を卒業後、母校でもあるこの高校で、八年前まで主に日本史を教えた。授業中、教科書を開きながらよく「文部省はこう言っているが、別の見方もあるんだ」と違う考えを披露した。授業は生徒たちに「知的好奇心を引き起こしてくれる」と人気があった。

高校教諭の林澤達さん(至)は「厳しかったが、生徒にリッテルを振ったり差別したりすることはなかった」と振り返る。

「温かい人だった」と会社員の松岡正樹さん(至)は言う。卒業直前の期末テストでカンニングが見つかったとき、ほかの学級では停学になった生徒もいたのに、松岡さんはなぜか「無罪」になった。ちなみに、「職員会議で浜崎さんが何時も一人で抱えのために抗弁していたよ」とほかの先生から教えられた。

軟らかい面もあった。自宅には、いつも生徒や卒業生らが相談

がん闘病中に「最後の授業」 鳥取西高の教え子が『伝えたいこと』出版

や遊びに来た。卒業生が来るよ、「おっ」と笑顔で迎え、マジックやトランプなどで夜を徹して遊んだ。

「胃が痛い」と体調の変化を訴えたのは、一九九五年春のことだ。鳥取赤十字病院で診察。胃にがんが見つかった。告知を受けた。同年九月に手術。大腸がんが見つかり、さらに翌年の春、肝臓に転移しているのが分かった。

県立図書館長の勤務の傍ら、自宅で療養する日々が続いた。教え子で内科医の徳永進さん(至)と心療内科医の片山正見さん(至)から主治医になった。



故浜崎洋三さん

「先生に、言葉を残してもらえないだろうか」。徳永さんが診てきたがん患者は、病気の闘いの中、ほとんどが言葉を残さず死んでいく。できる人には、後に残る者に何かを伝えてほしいと思っていた。徳永さんは九六年八月十日の夜、浜崎さんに電話をかけた。

「先生、自分の生き方や仕事などを振り返ってどうだったか、授業してくれませんか。最後の授業だけだ。声が聴かん。……三十分だけだ。声が聴かん。教え子の頼みには、嫌と言わない人だ。題は「私にとって戦後とは何か、にしようか。いや、簡単な方がいい。『伝えたいこと』に

「大人に都合よく 取り込むワナが教育だ」



卒業生を前に自らの主張を語りかける
浜崎洋三さん=96年8月18日、鳥取市東町2丁目の県立鳥取西高校で

してくれ」。

八月十八日、浜崎さんが三十六年前に初めて担任をもった一年八組で、授業は開かれた。教室に約百人の卒業生が詰めかけ、廊下まであふれた。

浜崎さんは教壇にひじきをつき、低い声で話し始めた。「ここで話をすることになったのは、はめられた、という感じがしています」。皮肉っぽいユーモアに笑い声が起こった。

がんは末期だった。三十分無

事に過ぎればいいが……。徳永さんと片山さんは教壇のむきに座り、浜崎さんを見守っていた。

しかし浜崎さんは話すうちに、だんだんと声を大きくし、時にはチョークを握って立ち上がった。

「大人の中でも、特に教員を信じてはいけない。子どもを大人中心の都合のよい考え方に取り込むのが教育だ」

卒業生らは涙を浮かべながら、時折ちりほめられる洋口の論評を聴いた。授業は大幅に延び、七十分及び及んだ。その一月後の九月十三日、浜崎さんは息を引き取った。

通夜に卒業生が集まった。「洋三さんが本を出したいと言った。みんなで頑張った。出て」。片山さんは呼びかけた。本には地方史の論文や随筆と「最後の授業」を収めている。発売は鳥取市の定有堂書店(0859・71・7166・6000)。本体、千八百円。

